

昨年台風十九号の豪雨による各地の河川の氾濫を知るまでは、台風でこわいのは、何よりも風だと思っていた。

というのは、あれは太平洋戦争の敗戦の二、三年後のことだったと思うが、疎開先で住んでいた家の屋根を吹き飛ばされたことがあったからだ。と言っても母屋の大屋根ではない。台所に付け足した物置小屋のトタン屋根であるが。バリツという大きな物音とともにいきなり天井が明るくなり、見上げると灰色の空が広がっていた。雨が降っていないのがせめてものことであった。

その頃、当時進駐していた米軍の意向だったのではないかと思うが、サマータイムが取り入れられたり、台風の名前が付けられたりしており、うちの物置小屋の屋根を吹き飛ばした台風は、たしかデラという名だったかと思う。

台風十九号の折も、その前の十五号が房総半島に風による大きな被害をもたらしたことがあったせいか、気象庁は風に対する注意をしきりに促していた。私もデラ台風を思い出し、ベランダに出

しっ放しの物干し竿や箒ほうき、塵取りちりとりなどを家の中に取り込み、さらに窓ガラスに補強用のテープを貼ろうとしていたら、

「うちの窓ガラスは二重になっているから、その必要はないですよ」

とマンションの管理人氏に言われたので、これはやめにした。

夜が更けるにつれて風が強まり、街路樹の櫛けやきの枝の揺れが大きくなってゆく。心配しながらも、いつか眠ってしまったらしい。

パトカーのサイレンの音で目が覚めた。カーテンの透き間からのぞくと、うちの斜め前の櫛が倒れているらしいのが目に入った。一本根こそぎ倒れたのだろうか。もつとよく見たいものだ。そう思ったが、風の強さにさすがに窓を開けるわけにも、ましてベランダに出るわけにもいかない。そのうち清掃車のような車が来て三、四人の作業員が降り立った。何をするのだろうか。見たかったがよく見えないので、あきらめてまた寝てしまった。

翌朝、目覚めると、雲一つない快晴である。昨夜の櫛はどうなったかと、早速、見に出掛けた。見ると、私の胸の高さほどの位置で三本に枝分かれしているうちの、真ん中の幹と思える一本が折れたらしく、その部分に鋸のこぎりが入られ、枝葉もろとも無くなっていった。

地面に多少散り残っている葉っぱを拾い上げてみた。葉の大きさは長さ約十センチ、幅約四センチ、形は先の尖った長楕円形でまわりにぎざぎざがあり、葉脈が十三、四本通っている。しげしげ

と眺めながら、櫛といえはどこにでもあり、よく知っているありふれた街路樹だと思っていたが、これまで葉の形はおろか、花も実も知らなかったことに気がついて、我ながら驚いてしまったのだ。た。

### 「清紫会」だより

- ◆第185回 二〇一九年十一月二十一日（木）、会場・文京区立アカデミー向丘二階和室  
〈提出作品〉林博子・辞書ものがたり／松井淑子・櫛
- ◆第186回 十二月十九日（木）、会場・文京区立アカデミー向丘二階和室  
〈提出作品〉市川茂子・転居してから／林博子・満天星、その想い出
- ◆第187回 二〇二〇年一月十六日（木）、会場・文京シビックセンター四階シルバーセンター和室二  
〈提出作品〉なし